

壁掛けや虫かご 自然の色合い魅力

麦わらら工藝広めたい

NPO法人札幌村文化センター(土肥信子代表理事)は、かつて農家で行われていた麦わら工藝の普及活動を本格化させている。今月から札幌市東区のカフェに拠点を構え、工藝品を製品化する準備に着手。同センターの活動に賛同した札幌聴覚障害者協会の協力を得て、十七日には聴覚障害者向けの講座も開く予定で、土肥さんは「幅広い人たちに工藝技術を伝えたい」と張り切っている。

(竹中達哉)

札幌村文化センター

麦わら工藝は刈り取ったオムギやコムギのわらを編み、空き瓶を利用して花瓶や、虫かご、壁掛けなどを作る伝統工藝の一種。ピンクや黄など鮮やかな自然の色合いが見る人を魅了する。

土肥さんは二〇〇一年秋、市内の農業体験で知り合った北区の無職小向操さん(セシ)に麦わら工藝の技術を教わり、「麦の美しさを伝えたい」と思い立った。〇三年と〇六年



自作の花瓶を手に「麦わらの美しさを多くの人に知ってほしい」と話す土肥さん。麦わらの色が鮮やかで見事な出来栄だ

東区に活動の場 障害者向け講座も

しかし、麦わら工藝を製作できる人は少なく、少数生産だと費用がかかるのもネックで、土肥さんは「ほそぼそと趣味の世界でやっているのはダメ。作り手を増やし、製品化しなければ後世に技術を残すことができない」と決意。東区伏古のカフェ「パイモン」を活動拠点とし、現在、「麦わら工藝作品展」を開催している。今後は月に一回程度、同店で市民向けの作り方講座を開く。大量生産の体制をつくるため、作り手だけでなく指導者の育成にも力を入れたいと考えた。

また、十七日に初めて行う聴覚障害者向けの作り方講座を皮切りに、聴覚障害者が手に職を付けるための講座も定期的に開く予定。作り手を増やし、製品化に成功すれば、東京都内や札幌市内のアンテナショップ「北海道とさんこプラザ」への出品も検討する。

工藝品の麦わらは契約農家やサッポロビール園(東区)から提供を受けている。土肥さんは「麦わらをそのまま捨てるのはもったいない。多くの人の協力を得て、活動が広がったので、何とか製品化までこぎ着けた」と意気込む。作品展や講座の問い合わせは同センター事務局 ☎782・1130へ(平日午後七時～午後九時)。